

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2019年度 助成者)

作成日 2019年11月23日

氏名 (フリガナ)	彦坂 菜摘 (ヒコサカ ナツミ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2019年10月27日(日)～ 11月2日(土)
所属機関名	鳴海クリニック
身分	看護師

以前から海外の医療制度や看護ケアについて、興味があり職場から研修に参加することを勧めてもらい参加した。研修に参加しオレゴン州での医療制度、看護ケアなどについて学ぶことができた。研修の中でいくつか印象に残っていることがある。

まず、ポートランドで働く日本人看護師の方からお話を聞く機会があり、自ら働きたい病棟・科を選択し、また自ら希望するまでは移動することはないという話を聞き自分が学びたいと強く思える場所で働けるからこそより学びを深めることができ前向きに働くことができるのだと感じた。看護師としての専門性を活かし自分を磨いていくためには良い環境だと感じた。しかし、人種差別や銃社会であることなど悲しい出来事についても話を聞き、日本の環境の良さを痛感した。

ポートランド大学看護科のシミュレーションセンターの見学では校内実習を行う場所では高機能なシミュレーション人形があったり、俳優を雇用し患者役を演じており、患者のケアだけでなく家族へのケアも設定されており実際の現場を想定しやすい環境が作られていた。またその様子が録画されており良かった点、改善点を振り返りディスカッションが行えるようになっていた。私が看護学生の頃、不安な気持ちを抱えながら臨床実習を行っていたことを思い出した。実際に想定できることで不安を取り除くことができ、自信をもって看護提供ができるのではないかと感じた。また振り返りを行い、お互いが実践した看護を認め合うことができおりとてもいいなと感じた。自己が行った看護について、客観的に振り返る機会が少ないため定期的に振り返りを行うことの重要性も感じた。

卒中ケアについての講義を受け、急性期のケアは治療開始までの時間が重要であることを改めて学んだ。またその場の治療だけに重きを置くのではなく、二度と再発しないために看護師の介入、教育が重要となることを強く感じた。

PPMCの院内見学ではメールや電話で病状について看護師へ相談できるトリアージ室という場所があり、医療費が高いアメリカでは受診した時には既に重症化していることが多くあるため、気軽に医療者へ発信でき安心感につながっていることや早期発見のために必要な体制であると思った。このような体制を取るためには看護師の高いアセスメント能力が必要であると感じた。

オレゴン州での医療制度については、アメリカでは貧困と格差があり、全ての人が医療保険に加入できるわけではないため、平等ではないと感じる人もいると聞き、日本の医療制度は充実しており、安心して医療を受けることができる環境であると感じた。

今回の研修ではアメリカと日本の医療制度の違い、看護ケアについての在り方などについてたくさん学ぶことができた。日本との違いに驚くことや刺激になることが多くあった。中でも私の印象に残っているのは看護学生、看護師の意識の高さに刺激を受けた。教育を受けることに前向きで働く上で常に疑問を持ち、問題点の改善に向けて研究意識を持っており看護師として誇りを持ち働くことができているということに刺激を受けた。また組織全体で協賛することで質の良い看護を提供できるのだと学んだ。今回の研修に参加し、とても刺激を受け日々学びを深め、看護師としての誇りを持ち質の良いケアが提供できるよう努めていきたいと感じた。また、研修で学んだことを日本ですべて活かすことは難しいと思うが、日本の医療制度の範囲で行えることを考え活かしていきたいと思った。